れる。而も善い土地を。私はこんな土地を見たことがありません。』
通辯はそれを翻譯した。バシユキル人は口々に話し續けた。バコームは何を言つてるのか分からなかつた。併し彼等は心の善い連中であることゝ、それからありたけの聲を出して話したり笑つたりして居ることが解つた。それから彼等は暫く默つて了つてバコームを眺めた。すると通辯は言つた。
『斯う申して呉れと言ふのです。あなたの御親切に酬ひるために、幾何でもあなたの望みだけ喜んで差し上げます。どれ位か寸言つて見て下さい――さうすりや貴方のものになりませう。』
彼等は尙ほ何か言ひつゞけて居たが、やがて憤つた樣な口調で口

論を始めた。バコームは何故口論して居るかを訊いた。
通辯は答へた。
『酋長に話して、其の承諾がなければ出來ないと言ふものと、酋長が居なくてもいゝと言ふものと居るんです。』

六

バシユキル人等は口論して居た。と突然狐皮の衣服を着た男が入つて來た。
皆な默つて了つて立ち上つた。そして通辯が言つた。
『酋長は此人です。』

バコームは間もなく最もよい毛氈を取り出し、五ポンドの茶と一緒に酋長に與へた。

酋長はそれを受取り、上座に坐つた。みんな早速彼に事情を告げた。

酋長はぢつと聞いて居た。皆に默つて居れといふ合圖に頭を振つて、それからバコームに向つてロシア語で言ひ出した。

『え、よろしい。何處でも好きな所を取りなさい。澤山ありますから。』

『欲しいだけ手に入るだらう。』とバコームは獨語を言つた。早速自分のものにして了はねばならぬ。でないと、また取り返されて了ふ

から。

『お言葉で有り難うございます。あなたが澤山土地を持つて居られることを知つて居ります。私はさう澤山は要らないのです。どうか恐入りましたがどれだけ下さるか仰しやつて下さい。出來るだけ早くそれを測つて確に私のものにして貰ひたいのです。人の生命といふものは分らんもんでして、あなた方の樣な善いお方が許して下さるんですが、またお子達がそれを取り返す樣な時が來ないものでもありませんから。』

『その通りです。確に君のものにしなくちやなりません。』と酋長は言つた。

パコームは切り出した。

『聞きますと、此處に一人商人が來て居つたといふことで、その商人にあなたが賣買の約束で土地をお與りなさつたさうでしたが、私もそれと同じにして貰ひたいものです。』

酋長はすつかりパコームの心中を了解んだ。

『その通りにしませう、書記が居りますから、町へ行つて其手續しませう。』

『代價は幾何程でせう?』とパコームは訊いた。

『代價は一つです。一日に千ルーブルです。』

パコームには解らなかつた。『如何いふ勘定ですか、その一日とかいふのは? 幾デシャチンです。

『それは勘定は出來ません。けれど私達はそれを一日に幾らと賣つて居ます。君が日の中に歩き廻られるだけ——それだけ君の所有です。そしてその一日分の代價が千ルーブルといふんです。』

パコームは喫驚した。

『ようございますか。私が一日に歩き廻られるだけなら、中々ですよ。』と彼は言つた。

酋長は笑つた。

『それはみな君のものです。たゞ約束があるんですよ。もし君が其日の中に出發したもとの所へ歸つて來なければ、金はふいになるん

ですよ。』

『では、私が廻つて來る所をどうして解る樣にするんです？』

『よろしい。私共は何處でも君の好きな所に立ちませう。そこに立つて居ませう。そこで君はかう廻つて來ねばならん。鶴嘴を持つて行つて、何處でも好きな所に記號をつけなさい。曲り角へ來たらそこに小さな穴を掘つて其中へ何か芝草でも入れときなさい。私共は犁をもつて其の穴をためて歩きます。どれだけでも好きなだけ境界を廣くなさい。たゞ日の入り迄にもとの所へ歸つて來なくちやいけません。さうすりや君が歩いた圍の中はすつかり君のものです。

パコームは喜び上つた。彼等は朝早く出掛ける約束をした。それから又その話をし、馬乳酒を飲み、羊肉を食ひ、茶を飲んだ。もう日暮になつた。パコームに寢床をこしらへてやつて、パシユキル人はそれ〴〵歸つて行つた。彼等は明朝未明に一緒に集つて來て、日の出と共に出掛る約束をした。

七

パコームは寢床の上に横になつた。彼は自分の得る土地のことを考へて、眠ることが出來なかつた。

彼はつぶやいた。

『己は素敵に廣い土地を手に入れることになる。己は一日に五十ヴエルスト歩ける。今は一日が一年の價になるんだ。周圍五ヴエルストだと隨分の土地だ。己は其の中の惡い所を賣るか。又は百姓共に貸すかしよう。そして己は好い所を選つて、そこへ移住しよう。二頭牛の犁を使つて、二人の作男を置かう。自分で五十デシヤチンスを耕して、殘りを家畜のための牧場にしよう。』

彼は徹夜まんじりともしなかつた。ほんの曉方になつてとろ〳〵となつた。一寸とろ〳〵としたと思ふと夢を見た。何でも誰かゞ此の同じ天幕の中で寢て居て、くつくつと笑つて居るのを聞いて居る樣だつた。それから彼は誰が笑つてるのか見ようと思つて、起き上つ

て天幕の外へ出た樣だつた。するとこは如何に！　あの同じ會長が天幕張の家の前に坐つて居て、其腹を抱へて何かしら大袈裟に笑ひ叫んで居るのであつた。

彼は其の側へ行つてそして尋ねた。

『何をそんなに笑つてるんです？』

すると最早其男は會長ではなくて、いつか彼に此處の話をした旅商人であつた。

彼は旅商人だといふことを知るや否や斯う尋ねた。

『お前さんは此處に長く居たのか？』

さうすると今度は最早其の旅商人ではなくなつて、ずつと〳〵前

にヴォルガ河を下つて來たあの百姓になつて居た。

それからバコームは、その男はもうあの百姓でもなくて、角や蹄の生えた惡魔が、そこに坐つて笑つて居ることを知つた、惡魔の前には襯衣と股引とを着た裸足の男が横はつて居た。バコームは其男が誰かしらと、一層よく注意して見た。

所が其の死んだ男は、誰あらう——彼自身であつた！　バコームは仰天して眼が覺めた。

彼は眼を覺ました。

『何といふ夢を見て居たんだ？』と呟いた。彼は四邊を見廻し、閉された戸の隙間から外を覗いて見た。もう既に明るくなりかけて夜

が明けんとして居た。

『皆な起きてるに違ない。もう時間だ。』と思つた。

バコームは起きた。馬車の中の下男を起して、馬具をつける樣に言つて置いて、それからバシユキル人を起しに行つた。

『時間だ、もう野へ測量に行く時間だ。』と彼は言つた。

バシユキル人は起きて皆集まつた。會長も出て來た。一同はまた馬乳酒を飲み始めた。彼等はバコームに茶を驕る樣にと所望したが彼はぐづ〳〵して居られぬ氣持になつて居た。

『もし出かけるんなら……もう出掛ける時間だ』と彼は言つた。

八

パシユキル人は準備をした。或者は馬に乘り、或者は車に乘つて出發した。パコームは下男と共に馬車に乘つた。鶴嘴を持つて居た。一同は曠原へ出た。夜は明けかけて居た。彼等は一つの岡に着いた。皆なそれぞれ馬や馬車から降りて一所へかたまつた。酋長はパコームの傍へ來て、手で指し、

『此處がすつかり眼の屆く限り己達のだ。君の好きなだけ取りなさい。』と言つた。

パコームの眼は燃える樣に輝いた。見渡す限りの野は青々として

草が繁つて居る。掌の樣に平かに、鍋の如く黑い。凹のある所は、人の高さ程の草が一ぱいに生えて居た。

酋長は狐皮の帽子を脫いで下に置いた。

『さあこゝが基點だ。こゝから出掛けて、こゝへ戻つて來るんだ。君が廻つて來る所はみな君のものだ。』と言つた。

パコームは金を出して、其の帽子の中へ入れた。衣服を脫ぎ、半襦袢一つになり、帶をぐる〳〵と腹のまはりに卷きつけて、ぐつと固く結び、首にパンを入れた袋をぶらさげ、小さな水筒を帶に挿し、脚絆を締め直し、下男から鶴嘴を取つて、出發の準備をした。

彼は何方側から始めようかと考へ〳〵た。何處も彼所も善い所だ

つた。

彼はつぶやいた。

『何處でも全く同じことだ、己は日の出に向つて行かう。』

彼は東に向いて彼所此方歩きながら、太陽が地平線に上るのを待つた。

『時間を潰すまい。今日は涼しくて歩きいゝ。』と獨語つた。

日光が地平線上に現はれるや否や、彼は鶴嘴を肩にかけて、そして曠原を出掛けて行つた。

バコームは遲くも速くもなく歩いた。一ヴエルストほど行つた時に、彼は立ち止つて、小さな穴を掘つて、眼につく樣にそこへ芝を

投げ入れた。

更に進んで行つた。行くに從つて足を早めた。行きながら他の小穴を幾つも掘つた。

バコームは四邊を見廻した。まだかの岡は見える所にあつた。一同はその上に立つて居つた。自分の馬車の車輪が朝日に輝いて居た。彼は五ヴエルストも來たと想つた。暖かくなりかけて來た。襦袢を脱いで肩にかけて、歩き續けた。すると暑くなつて來た。彼は太陽を見た。もう朝食時であつた。

『これで一ときり終つた。四度で一日になるんだ。まだ方向をかへるのに早過ぎる。どれ靴だけ脱げ。』と彼は思つた。

彼は腰を下して靴を脱ぎ、帶にぶらさげて歩き出した。足が輕くて歩きよくなつた。『もう五ヴエルスト行け、それから左へ曲らう。此邊は馬鹿に宜い、此處を捨てるのは惜しい。』と獨語した。

だん〳〵行くに從つて、土地は益〻よくなつた。で尙ほ眞直に進んで行つた。彼は振り返つた。――岡は今は殆ど見えなくなつた。そして人々は小さな蟻の樣になつて、その上に黑い點をなして見えた。何か知らぬが光つて居た。

『よし、これで此方向へ充分來た。もう曲らねばならぬ。隨分な汗だ。水が飲みたくなつた。』

彼は立ち止つて、穴を掘り、芝を投げ入れ、水筒をゆるめて水を

飲んで、そしてかつきり左へ曲つた。彼は歩きに歩いた。――草は深くなり、日は暑くなつた。

彼は疲れを覺え始めた。太陽を見ると晝飯時であつた。

『どれ、一休みしなくちやならぬ。』

彼は立ち止つた。そして座つてパンと水とを出した。併し決して横にならうとはしなかつた。彼は獨語を言つた。

『もし横になつたら、眠つて了ふかも知れない。』

暫く坐つて居たが、それからまた出掛けた。彼は樂に歩けるなと思つた。食事を取つたので、元氣が回復したが、今や非常に暑くなつて來た――さうだ。そして太陽が傾き始めた。併し彼は尙ほ歩き

續けた。彼は言つた。

『一時間辛抱せい、さうすりや一代食へるんだ。』

彼は尙ほ同じ方向に向つてずん〳〵進んで行つた。左へ曲らう曲らうと思つて行くと、こはいかに！そこは低濕の地となつて來た。

それは見捨てるには惜しかつた！で獨語を言つた。

『今日は當り日だつた』

彼は尙ほも眞直に進んで行つた。低地へ入つた——その谷ともいふべき低地の向ふ端に穴を掘つて、それから第二の角へ來た。

パコームは岡の方向を見かへつた。熱氣の爲めにぼうつと霞んで空氣は震へて居た。それを通じて岡の上の人々が辛うじて見えた。

『よし、今の側は長かつた——今度は少し早く曲らねばならぬ。』

斯う言つて第三の側を歩きだした。——彼は足を早めようとした。太陽を見た——もうずつと西に傾いて居た。そして第三の側はたつた二ヴエルスト行つたばかりで出發點の方へ向つた。そこからまだ十五ヴエルスもあつた。

『さうだ、道が平でなくても、眞直に大急ぎに歸らねばならぬ、あまり慾ばるといけない。これだけでも、もう餘程の土地だ。』

パコームは大急ぎで穴を掘つて、眞直に岡に向つた。

九

パコームは岡の方へ眞直に急いだ。それはもう彼にとつて苦しい仕事となり出した。彼は汗みどろになつて、裸足の足には切創やら擦り疵やら出來て、自由が利かなくなりだした。休息したいと思つたが、それは不可能であつた。彼は日沒まで休むことが出來なかつ。太陽は少しも猶豫しないで益々低く沈んで行つた。

『あゝあ！』と彼は呟いた。『おれは馬鹿間違をやらかしたに違ないかしら？　あんまり取り過ぎたに違ないかしら？　何故おれは早く急がないか？』

彼は岡を眺めた。――そこは太陽に照らされて居た。まだそこまでは大分遠い。而も太陽はあまり高くない。

尙ほ〳〵パコームは急いだ。中々苦しかつたが、彼は益々足並を速め速めした。歩いても歩いても――いつまでもまだ遠かつた。彼は足並を二倍にした。彼は襦袢も、靴も、水筒も捨てゝ了つた。遂には帽子までも脱ぎ捨てゝ了つた。が鶴嘴だけはしつかり持つてそれにたよつて歩いた。

『あゝ』と彼は獨語をいつた。『己はあまり慾が深か過ぎた。すつかり駄目にして了つた。日の入までに迚も歸れない。』

心配のために呼吸も苦しくなつて來た。パコームは走つた。――襯衣と股引とが汗にびつしよりになつて體にくつついた。――口はねばりついた。胸にはまるで一對の鞴が火を吹いて居る樣だつた。

そして心臓の中にはまるで水車が廻つてる様で、脚はもう殆ど折れさうであつた。

苦しくてならぬ様になつた。彼は言つた。

『労れきつてで死なうものなら。』

彼は死に倒れるのを恐れた。けれども止ることが出來なかつた。

『こんなに走つて來た後で。今止らうものなら、皆な己を馬鹿だと言ふだらう。』

彼は走り且つ走つた。もう大分近いて來て、皆なの叫いて居るのが聞えて來た。そして彼等の叫くのが、一層バコームを苦痛に感せしめた。

バコームは最後の力を振つて走つた。太陽は地平線の端にさまようて居た。夕靄に包まれて、血の如く赤く、大きく輝いて居た。最早――最早沈みつゝあつた！　太陽は殆ど沈んで了つた。けれどもバコームも出立點には、今は左程遠くはない。もうその場所が見えた。岡の上の人々が彼に向つて身振をし、元氣をつけて居るのも見えた。彼には地面の上の狐の皮の帽子も、其中の金さへも見えた。そして彼は地面に座つて腹を抱へて居る酋長を見た。すると昨夜の夢が想ひ出された。

『澤山の土地だ、だが、神は己にその上に住ませることを欲しないんだ。あゝ、己は自分で自分を滅茶々々にした。おれはそれを手に

入れられまい。』と彼は自分に言つた。

バコームは太陽を眺めた。もう既に沈んで了つて居た。形は既に隱れて、最後の光線が地平線の下に消えて居た。

彼は最後の精力を絞り出した。身體ごと飛ぶ樣に走つた。脚は辛つと身體を支へた。

バコームが岡に達すると同時に、俄に暗くなつた。彼は太陽の沈んで了つたのを知つた。彼は唸つた。

『すつかり骨折が無駄になつた。』と思つた。彼は將に止らうとした。けれども尙ほバシユキル人が皆な叫んで居るのが聞えたので、まだ自分が下に居ることに氣がつき、そしてそれ故に太陽は岡の頂に居

る彼等にはまだ見えるんだが、自分にはもう沈んで見えなくなつて居るといふことに氣がついた。バコームは呼吸をついで岡へ駈け上つた。そこはまだ明るかつた。バコームは走つた。するとそこに帽子があつた。帽子の前に酋長が坐つて、腹を抱へて笑つて居た。

バコームは夢を想ひ出して『あゝ!』と唸つた。もう足は自由にならなかつた。そして前の方へ打ち倒れた。帽子の方へ手をさしのべて。

『やあ! 出かした〳〵!』と酋長は叫んだ。『君は大變な土地を儲けたぞ。』

バコームの下男は傍へ走つて行つて起さうとした。併し彼は口か

ら流れる樣に血を吐いて、そして死んで了つた。

バシユキル人は皆な其の舌を鳴らして悲しみの情を表はした。

バコームの下男は鶴嘴を取つて、彼の爲めに墓穴を掘つた。頭から足まで丁度一ぱいに入る樣な——七尺ばかりの——そして彼を埋めた。

三つの死了

昭和二年九月五日印刷
昭和二年九月十日發行

不許複製

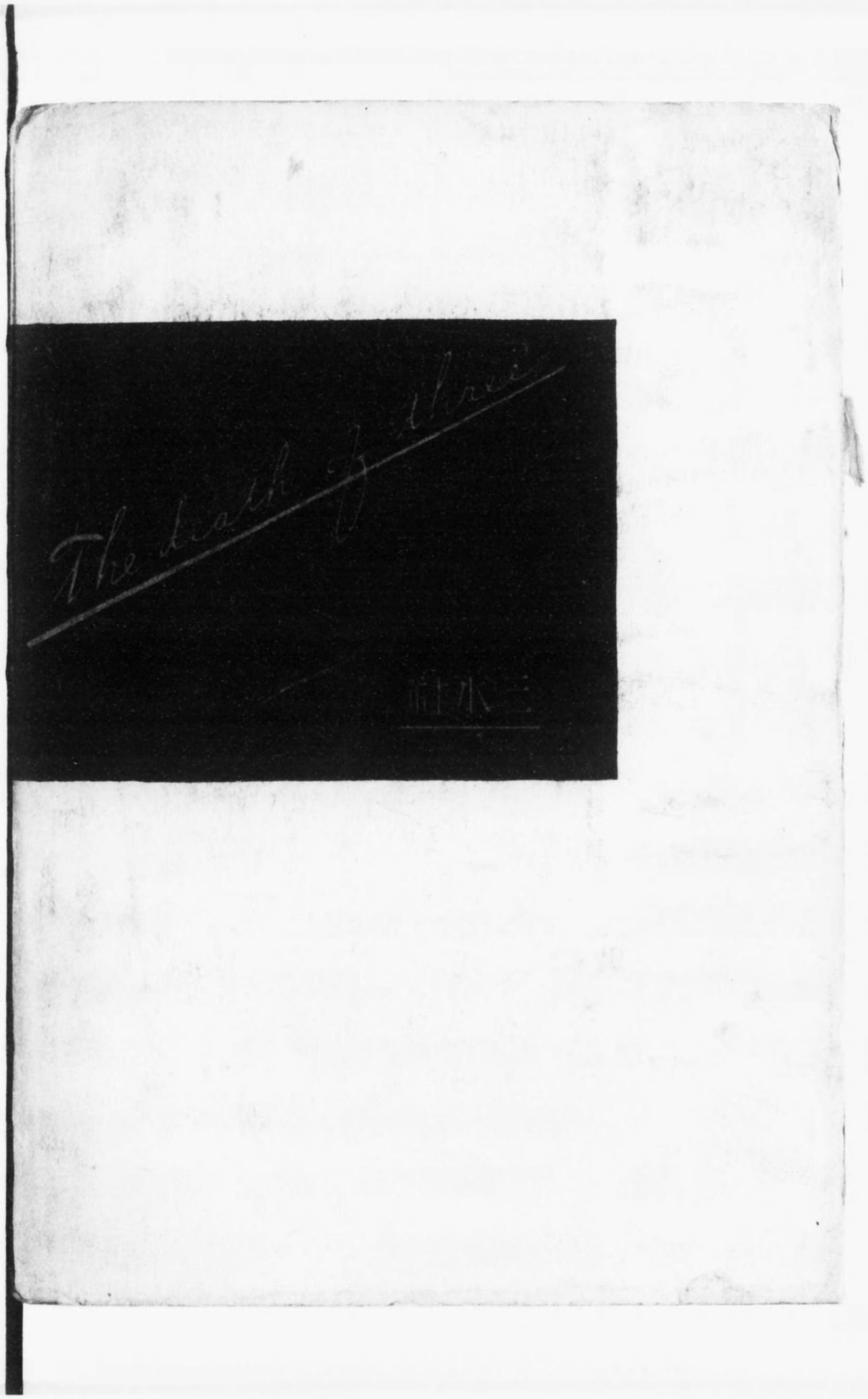
三つの死　定價金五十錢

編輯兼發行人　東京市日本橋區蠣殼町一ノ四　大谷德之助

印刷者　東京市日本橋區蠣殼町二ノ四　久保田義夫

印刷所　東京市日本橋區蠣殼町二ノ四　勝島活版所

發行所　東京市日本橋區蠣殼町一ノ四　三水社出版部
振替東京五一〇〇六番
電話茅場町二三六七番

312
209

終